

「おだやかな日常」☆☆☆☆

2012（平成24）年10月31日

鑑賞<シネ・ヌーヴォX>

監督・脚本・編集：内田伸輝
プロデューサー：杉野希妃、エリック・ニアリ
サエコ／杉野希妃
ユカコ／篠原友希子
タツヤ（ユカコの夫）／山本剛史
清美（サエコの一人娘）／渡辺杏実
ノボル（サエコの夫）／小柳友
典子／渡辺真起子
美加／山田真歩
洋子／西山真来
被災地から来た男／寺島進

2012年・日本、アメリカ映画・102分

配給／和エンタテインメント

<『希望の国』と軌を一にする本作の問題提起は？>

去る10月29日に見た園子温監督の『希望の国』（12年）は、前作『ヒミズ』（12年）に続いて、3・11東日本大震災後の日本を描いた問題作だった。また『ヒミズ』が津波被害から生まれた人間ドラマであったのに対し（『シネマルーム28』210頁参照）、『希望の国』は原発事故による警戒区域の設定という線引きの不条理性とそこから生まれる人間ドラマを描いたものだった（『シネマルーム29』37頁参照）。そして、その結末は『希望の国』というタイトルとは程遠い意外なものだったが、それをどう解釈するかはあなた次第・・・。

しかし、私が『歓待』（10年）以降注目している（『シネマルーム27』160頁参照）「アジア・インディーズのミューズ」杉野希妃がプロデュース兼主演し、内田伸輝監督が監督した本作の問題提起もそれと軌を一にするもので、原発事故による放射能汚染への恐怖の中で、傷つき壊れていく2人の女性の姿を描いたものだ。映画鑑賞後の杉野氏の話によると、本作はもともと一人の女性主人公ユカコ（篠原友希子）だけの物語として構想されていたが、杉野の参加により彼女が演じるもう一人の主人公サエコの物語が加わったそうだ。

3・11東日本大震災を受けて、多くの映画人がドキュメンタリーかフィクションかを問わず、その問題点とそこから必然的に生まれるさまざまな人間ドラマを追いつけているが、本作は東京に住む2人の平凡な女性を主人公にしたところがミソ。そう、目に見えない放射能汚染は被災地から半径20km圏内の「警戒区域」のみならず、日本の首都・東京にまで及んでいるわけだ。『希望の国』もそのタイトルが物語の実体と大きくかけ離れていたが、本作の『おだやかな日常』というタイトルもどこか逆説的。さあ、サエコとユカコ、2人の「おだやかだった日常」は、原発事故による放射能汚染が東京にまで影響を及ぼす中、いかに「おだやかでない日常」に転化し、彼女たちの人生にいかなる変化を及ぼすのだろうか？

<サエコが異常？それとも周りがヘン？>

『希望の国』は3つの家族が紡ぎ出す物語だったが、そこでも神楽坂恵が演じるいずみが妊娠5週目であることがわかった後、産婦人科医から「医師たちがテレビで語っている放射能に関する情報はウソばかりだ」と聞いたことをきっかけに大変身していく姿が描かれる。夫の父親からの強行な意見によって夫と共に被災地から安全な町に移住したはずだから、その町で宇宙服のような防護服を着てウロウロされたのでは、町の住民が迷惑。いずみとその夫に対して町の住民からそのような非難が高まったのは当然だが、さてそこではいずみが異常？それとも周りがヘン？

本作でもそれと全く同じ問題提起がなされている。すなわち一人娘の清美（渡辺杏実）が通う幼稚園の先生に対して、サエコから「娘を庭で遊ばせるな」、「早く放射能汚染の測定をしろ」等々の要求を出されると、幼稚園のスタッフは困惑せざるをえないうえ、同じ保護者の典子（渡辺真起子）からはサエコに対して「むやみに不安を煽り立てないで!」、「それって被災者・避難民に対する差別じゃないの!」との容赦ない反撃が加えられてきた。

震災の日にも浮気していたらしい夫ノボル（小柳友）から見捨てられたサエコが、懸命に放射能汚染から一人娘の安全を守ろうとする行動は、そんなに異常？それとも内心の不安をそれとなく封印し、「政府は安全だと言っている」とか「同じ日本人として我慢しなきゃ」などの建前論をくり返している典子たちの方がヘン？

<あっちの男はダメだったが、こっちの男は？>

近時は「草食系男子」が大増殖しているらしいが、本作ではサエコとユカコの2人の女たちが原発事故がもたらす放射能汚染に対して必死に闘っているのに対してサエコの夫ノボルのいい加減さ、だらしなさが際立っている。また最近の男はみんな優しさが取り柄らしいが、ユカコの夫タツヤ（山本剛史）を見てみると、いかにタツヤがユカコの尻に敷かれているかがよくわかる。

近時のシャープの例を挙げるまでもなく、「失われた10年」がその後も続く日本では、自分の働いている企業が生き残れるのかどうかそれ自体が不安だが、それ以上にその会社に不満を持って辞めてしまったら、次の就職先を見つけるのはもっと大変。タツヤはそう思って、今どきの一般的な会社人間の一人として頑張っているのだが、それが妻のユカコの目から見ると歯がゆいらしい。ある日タツヤがつい本音をもらしたことによって起きた夫婦ゲンカ(?)の様子をみていると、この夫婦は圧倒的に力カア天下だが、なぜどこもかしこも男はこんなにだらしないの？もっとも、ノボルは箸にも棒にもかからないダメ亭主だったが、本作ラストに展開されるタツヤからユカコに対するある積極的な「提案」をみていると、こっちの男はやるときはやる・・・？

<こんなに頑張ったのに！この意外な展開にビックリ！>

杉野希妃はまだ独身で、もちろん子供もいない。もっとも、彼女は1984年生まれだから子供がいてもおかしくない年齢。そこで、本作で彼女は若いママ役に取り組んでいるから、ママとしての奮闘振りに注目！本作では勝手に女をつくって家から出ていったノボルがサエコに対して慰謝料や養育費を支払っている雰囲気は全くないから、女手一つで清美を育てていくのはそもそも経済的に大変。そんな状況下で、清美のためを考えて毎日こんなに頑張ってきたのに、清美が鼻血を出している姿をみると・・・。

本作はそこから何とも意外な展開をみせていくが、なぜサエコは震災直後にノボルが妻子を見捨てて家を出て行ったことを両親に報告しなかったの？それが被災地にいる両親に対する遠慮であったことは確かだが、サエコが本作にみるような短絡的な行動に走ったのでは、かえって被災地に住む両親を悲しませることになるのでは？サエコの意外な行動はあなた自身の目で確認してもらいたいの、ここでは触れないことにするが、この展開が本作最大のポイントになるので、要注目！また、この意外な展開を契機として同じマンションの隣同士の部屋に住んでいたサエコとユカコとの間に放射能汚染への怒りを前提とした女同士の連帯ともいうべき奇妙な関係が生まれてくるので、なぜそんなものが生まれてくるのかについても、じっくりと考えてもらいたいものだ。

<こちらの女優、篠原友希子にも注目！>

私は内田伸輝監督の『ふゆの獣』（10年）をかなり気にしながら、見逃していた。また、ユカコを演ずる篠原友希子を本作ではじめて見た。篠原友希子はこれも私が気にしながら見逃していた『苦役列車』（12年）に出演していた女優だが、本作では杉野希妃と共に堂々の主役ぶりを見せている。せっかくサエコの危機を助けてやったのに、その後「あなたのせいで娘の清美を夫の両親に奪われてしまった」と逆恨みされたのではユカコはたまったものではない。あっと驚く「あの事件」以降のストーリー展開を私はそんな目で見えていたが、前述のとおり、なぜそこから「女同士の連帯」が生まれたのが本作の1つのポイントであると同時に、そこにおける篠原友希子の演技力にも注目！そんな目でよくよく見てみると、この女優はかなりの美人。

夫婦ゲンカをしてふてくされているユカコを見ていると若干腹が立ってくるが、放射能汚染から園児たちを守るために幼稚園に乗り込んで闘う姿や、清美を取り戻すために懸命にサエコと行動を共にする姿をみていると、ユカコはちょっと精神的にアンバランスかもしれないが、本当は純粋な心をもったいい人なのだと確信することができる。その結果、サエコとは異なり、本作のラストでは夫のタツヤからのある積極的な提案に感動し、涙することになるのだが、本作ではそういうストーリー展開の中におけるユカコの成長ぶりにも注目したい。今後、女優・杉野希妃だけでなく、ユカコを演じた女優・篠原友希子にも注目だ。

<他の邦画も本作の英語の字幕を見習ったら・・・>

本作は第42回口ッテルダム国際映画祭スペクトラム部門に出品されたが、大阪市西区の九条にある「シネ・ヌーヴォ」という単館で上映されるだけで、シネコンで上映されるような大規模な映画ではない。しかし、そこで注目されるのは本作にはちゃんと英語の字幕がついていること。これは韓国やマレーシアなどの東南アジアはもとより、「全世界と合作映画をつくっていきたい」と壮大な夢を語る杉野の意向によるものだが、その心意気や良し。是非、他の邦画もそれを見習ってほしいものだ。

2012（平成24）年11月6日記